

論題	畑作と「ツカ」—相模原台地の事例を中心に—
著者	加藤隆志
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— 第13号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1987年(昭和62年)3月
判型	JIS-B5(182mm × 257mm)

畑作と「ツカ」

——相模原台地の事例を中心に——

加藤 隆 志

はじめに

神奈川県は、京浜工業地帯をひかえた日本でも有数の工業地帯であり、さらには東京・横浜等への勤務地を持つ多数の会社員の住宅地化が進行し、第一次産業の比重が著しく低下した地域であるが、かつては東京湾・相模湾沿岸の漁業、相模川下流域・酒匂川流域の水田農業、多摩丘陵・相模原台地を中心とした畑作農業、県西部山間地の林業など、変化に富んだ地形に応じて多様な農林水産業が展開されていた。

近年、民俗学等さまざまな学問から日本文化の稲作単一文化論の見直しが提唱され、畑作(焼畑)・漁業・諸職(職人)等、多様な日本文化を相対的に捉え直す試みがなされつつあるのは周知のとおりである。

こうしたなかで畑作の研究は、類型化して水田稲作と比較するため焼畑にその中心が据えられているようであるが、焼畑とともに常畑・切替畑などを含む多様な畑作の調査研究は、当該地域の全体像をより正確に把握するうえでも、今後、その必要性がより増してく

ると思われる。

本稿は、「ツカ」という畑の広さなどを表す単位について、神奈川県内でも畑作に依拠する度合いが高かった相模原台地(特に北部)に伝承される事例を中心に述べ、あわせて同地域の近世・近代の記録・日記にもふれながら、その若干の問題点等を整理しようとするものである。⁽¹⁾

相模原台地は、神奈川県ほぼ中央を流れる相模川の左岸に南北四〇キロメートル、東西七・五キロメートルにわたって広がる洪積台地である。台地南部では、小河川による開析が進んで起伏に富んでいるが、北部はほとんど開析されず、厚い火山灰性土壌におおわれた平坦地が広がっている。このような地形的特色により生業的には畑作が中心で、たとえば台地北部に位置する現相模原市域における明治前期の地目別面積をみると、資料のない旧大島・旧下九沢村の二か村を除いた相模原市域旧一六か村のうち、全く水田をもたないものが八か村に及び、最も田の割合が高い市域西南部の相模川沖積低地にある旧新戸村でも一六・三%(畑は六四・六%)にすぎず、宅地・山林等を含めた土地利用全体の中でも旧一六か村で畑は六〇%以上を占めている。また、同時期の耕地における田畑の面積比でみると、田五に対して畑九五となり、耕地のなかではもちろん、全体の土地利用でもずばぬけて畑地が多い地域といえる。⁽²⁾

さて、本稿で述べようとする「ツカ」であるが、まず相模原市域での事例を北から順に引いていく。

事例① ヒトツカというのは三畝の畑を作るのに必要な施肥量で、どの作物でも同じである。一反でミツカという。ヒトツカの肥料量はコイヤルに七ザルくらいで、ヒトザルは一斗二、三升入る(相原)⁽³⁾。

事例② 畑の面積を何升マキ、何トウマキ、あるいは何ツカといった。一反は二斗五升マキで四ツカくらい(小山)⁽⁴⁾。

事例③ ミツカ一反であったが、地味肥沃の地はフタツカ一反であり、地味痩せ地はヨツカ一反とする所もあったという。ツカは面積の単位ではなく、領主の年貢米徴収のための基準であったという(相原・橋本・小山地区)⁽⁵⁾。

事例④ ツカというのは畑に麦、小麦、オカボなどを播く時に種と肥料を混ぜる単位で、一反はミツカゴエである。ヒトツカに堆肥が箕で四、五杯(一箕一桝として一斗二、三升)である。オカボでも麦でもだいたい同じ。種と堆肥を混ぜている時に、播種する面積で肥料の量を調節する。また、マキというのは、一反の畑に播く種の量で、小麦は三升マキといった。厚く播くには三升五合マキにしたが、あまり厚く播くと肥料がたくさん必要であった(大島)⁽⁶⁾。

事例⑤ ツカとは肥料配分の単位でもあり、面積の単位でもある。また、単位というより、肥料と面積の目安のようなものだともいう。このあたりでは、一反ミツカといわれている。したがって一ツカといえは三畝一〇歩で、三ツカは三〇〇坪、一ツカ一〇〇坪で

ある。津久井や原町田では一反四ツカと聞いた(大島)⁽⁷⁾。

事例⑥ 田は一畝のことを一縄、畑は三畝のことを一ツカという(大島・上九沢・下九沢地区)⁽⁸⁾。

事例⑦ ツカとは面積の単位だという。一反は三ツカ程度であるという。ヒトツカといえは肥料がヒトカマスくらい必要である。したがって一反だとミツカゴエで、ミカマスくらいの堆肥が必要であった(田名)⁽⁹⁾。

事例⑧ ヒトツカという一反を三つに区切ったひとつの土地(約三畝一〇歩)をいい、播き物を基準とした単位である。コエミ(コヤシをすくう箕)に堆肥九杯で、だいたい三ツカ分くらい。そこにカリンサン・アンモニア・シメカス・米糠などを配合した化学肥料を混ぜて施肥する。この上に麦の種を播き、土をかける。

ツカとは別にポッチと呼ばれる単位もある。ひと山ということではトポッチは堆肥コエミ九杯で、三ツカ分くらいである(田名)⁽¹⁰⁾。

事例⑨ 三ツカで一反、三畝でヒトツカであり、畑の広さをあらわす。ヒトポッチは三ツカかという(田名)⁽¹¹⁾。

事例⑩ 畑の場合、一反が三ツカ、一ツカ三畝^(マ)。なお、種まきのもみまたは種子の量は、一ツカで大麦は一升三合、小麦は九合一升、粳の場合は一ツカ一升一、二升(田名)⁽¹²⁾。

事例⑪ 一反三ツカで、幾ツカ種を播いたとか幾ツカさくつたなどといった。ツカは畑で使用する。これに対して、田では五畝の五升ツミといった。これは摘み田のなごりかという(下溝)⁽¹³⁾。

事例⑫ 下溝にはヨツカワリという地名がある。これは麻溝台の

方にある地名で、昔、ヨツカずつ分配した開墾地である。このヨツカワリの近くには、この他にもイッタンワリ(ステバワリ)・ガッコウワリ・ヨンセワリ・ロクセワリなどの分配地がある(下溝)⁽¹⁴⁾。

事例⑬ 畑は畝歩でいったが、一反を三ツカともいった。三畝の畑は一ツカである(下溝・当麻地区)⁽¹⁵⁾。

事例⑭ ツカというのは、上の段の下溝古山あたりの田をほとんど持っていないところで、畑の面積を示す語として使用していたようであるが、磯部では使わなかった。これに対して何升マキというのは播種作業の際、一反あたりに何升の種籾を使うかをあらわすもの。これは使っていた(磯部)⁽¹⁶⁾。

以上、事例を羅列的に述べてきたが、畑の面積等を表す言葉として「ツカ」が相模原市域で広く伝承されていたことがわかる。このツカは、穀物の播種の際に肥料(堆肥が主)を塚状に盛り上げた形状をいったもののようにであり、それは相模原でよくいわれる「一反ミツカゴエ」(一反の畑を作るためにはミツカ分の肥料が必要)という伝承にも表れている。そして「ツカ」は単に堆肥が盛り上がった形状をいうだけでなく、畑の広さや、施肥量や幾ツカ種を播いたとか何ツカさくったなどというように作付け等の作業量などをも表現する基準となっている事例に注目したい。

いま「ツカ」は、畑での穀物の播種の際に使用する堆肥等を盛り上げた塚⁽¹⁷⁾ツカからでたものではないかと述べたが、相模原でのかつての播種法は種肥混合播である。これは種と肥料を混ぜて播種する方法で、神奈川県では県下全域にわたってみられたものである⁽¹⁷⁾。

相模原においてはマゼゴエあるいはマゼコミで播く(特に名称なしという事例も多い)といわれ、麦・陸稲・粟などの播種にひろく行われていた。あまり早く混ぜると種がいたむため、播種を行う日の朝早くに堆肥をきり出してコエタキで細かくし、それに種と金肥・下肥などを加えて混ぜたものをマンノウで何回かとりかえしてカマスやコエタワラで畑に運ぶ。そして明るくなったら前日にせびいてあつた畑にツミオケを使って点播する。また、粟はゲスツブリといって人糞と混ぜて播くこともあり、これはゲスツブリオケに粟と人糞を入れ、古くなった椀に取っ手をつけたもので播いた。このマゼゴエ・マゼコミ(種肥混合播)は、肥料と種を別々に播く方法(さくった土に堆肥をおき、その上に指をひねるように種を播くのでヒネル・ヒネリマキなどといった)に比べて、種が肥料の下になって発芽が悪くなるものが出るものの作業は一工程省いてあるので軽減され、かつてはほとんどがこの方法による播種であったが、その後しだいにひねって播くようになったという(耕地肥)。以上は相模原での事例だが、このツカというものも右に述べたような種肥混合播慣行との関連が考えられるのである。

さらに事例によって気をつくことは、ツカのほかに何升マキ・何升ツミ・ポッチなど、ツカとはまた別の基準があることである。特にマキ・ツミは、水田での種籾の播種量とされ、事例⑭の、上の段(相模原台地は段丘崖が発達した台地であり、段丘崖によって上段・中段・下段・沖積低地に分けられる。下溝の古山集落は中段に位置する)の畑地中心の集落ではツカを用い、相模川沖積低地に広

がる水田の比較的多いところでは何升マキといったという伝承や、下溝で何升ツミというのは摘田のなごりではないかといった伝承は注目されることである。何升マキといった言い方は各地でも割合に広く伝承されているものであって、畑で用いられる事例もみられることから、この相模原の例だけでは早断できないが、ツカ・マキ・ツミ・ポッチなどが、なんらかの区別を付けられながら用いられたことがわかる。ツカは別の基準と並存していたわけである。

また、相模原市域では一反ミツカが標準であるが、これは必ずしも定まったものではなく、土地や土質などにより相違があるようである。その違いには、一反の畑を作るため幾ツカの肥料が必要かということと、ヒトツカにはどのくらいの肥料を使うかといった両面があると思われる、先にあげた事例でもそのあたりをうかがわせるものがあったが、ツカが施肥量などをはじめとした各種の目安を表すものだとすると、その畑のおかれている条件によって違いが出てくるのは当然ともいえよう。そしてこれは、ツカが後にみるように、公の基準とはなり得ない事にもつながってくる。

さて、ツカは現在の相模原市域に限って伝承されているわけではもちろんない。以下、近隣地の事例をあげる。

事例⑮ 八王子市域では、今のところツカの伝承は南西方面の神奈川県寄りの地域に濃く、北部にはほとんど見られない。ツカを知っている人の多くが「ツカは相模原の方に多い」と話している。三畝ヒトツカ（一反ミツカ）が多く、二畝ヒトツカというところもある。⁽¹⁸⁾

事例⑯ 何ツカという言い方はこちらでは使わなかったが、相模川の対岸（相模原）に畑を持っていてそちらでは使っていた。三畝でミツカゴエと記憶している。ヒトツカで肥料用の箕（自家製の竹箕）に六箕、ミツカでカマス三つくらいであった。昔の人は細かいきれいな堆肥を作り、種と混ぜて播いていたが、その後は肥料と種を別々に播くようになった（城山町葉山島）。⁽¹⁹⁾

事例⑰ 畑作での堆肥の量は、ヒトツカ、フタツカという具合に「ツカ」という言葉であらわされる。ヒトツカというのはその年の堆肥の量によって、一〇ザルにしようとか、一二ザルにしようなどと決める。一ザルというのはコイザル（竹箕）に入るだけ山に入れた量で、イチツコ（家によって大きさが多少ちがう）一つは二ザルでいっぱいになる。ヒトツカが一ニザルだと篤農家で、豊富に使う方であった。麦だとヒトツカが一ニ〜二三ザルが一般的であったが、中には一〇ザル、一五ザルということもあったという。

ヒトツカは畑の五升マキ分となる。畝歩でいえば一反が一斗二升マキであり、五升マキは約四畝となる。また、人によっては畝歩計算をする人もあり、この人は「五畝ツカ」といい、ヒトツカを五畝につかった。五升マキヒトツカ、五畝ツカというのはどの畑作物にも共通であり、ヒトツカの堆肥量が作物によって異なってくるのである（大和市福田）。⁽²⁰⁾

事例⑱ 大麦・小麦の種は一反で五升は必要であった。種は、ツクテと混ぜるが堆肥のツクテを主に使いリンサンとカリを混ぜる様になった。畠は四畝で一ツカといい、肥料は四畝ブリで一ツカセと^(ママ)

いう。肥料を箕に一〇杯又は一二杯で一ツカセと決めて庭にポッチにしてそこに種を混ぜた。だいたい一ツカセで箕に一二杯だった。これをビクに入れてテンピンボウに提げて畠に担いでいき、ツミザルかツミオケに入れて四本指でつんでいった(藤沢市高倉)⁽²¹⁾。

事例⑩ 種をまく前日に、家の庭で、完全に腐らせた堆肥をツカ(うず高く盛ること)にし、それに金肥を混ぜる。一ツカは竹箕やザルで一〇杯から一五杯で、山にして積んだ堆肥の頂部を少しけずって、そこに金肥をまぜ、三回くらいマンガアで手前にきりかえして混ぜ込んだ。金肥には米糠、シメ粕、麦糠、過燐酸を使った。この肥料は種をまく前に、サクに摘み肥にしておく。フグツに入れて天秤棒でかついで畠に運んだ。一ツカは四荷から四荷半(一荷というのは天秤棒の両端にフグツを一つずつつけたもの)くらいになった。一反に二ツカ摘んでいったという。摘み肥(三本指―親指・中指・人指し指―で肥料を摘み、サクに落としていくこと)をしたあと、その上に種をまいた。熱心な人は、摘み肥のあとで間土(マツチ)をして、その上に種をまいた。普通は間土をしない。乾いた種をまくため、種が適当な水分を得て根を出すまで日がかかる。その頃には摘み肥がよく土と混じっており、肥料の上に直接種をまいても根をいためることはないからという。手のない人は、摘み肥に種を混ぜ、一回で摘んでしまった。現在では堆肥を摘んだりせず全面的に畠にすき込んでしまい、金肥を種のすぐそばへ摘んでいる(藤沢市用田)⁽²²⁾。

事例⑪ 粟の肥料は、麦の摘み肥より細かくしたものを使った。

カリ分が非常に必要なので堆肥に焼き灰を多くまぜ、それに田の土の細かくしたものを半分くらいまぜた。堆肥の量は一反に一ツカくらいでよい(藤沢市用田)⁽²³⁾。

事例⑫ モク、人糞、草、大根、イワシを腐らせたもの(キリダ、サカナゴイという)を用い、カリン酸は大正末期になって入った。ヒトツカ(一畝半)の堆肥に三升入れた(三浦市)⁽²⁴⁾。

目についたわずかばかりの事例をあげたが、これらによっても先に相模原地域の事例によって述べたいいくつかの点を確認できる。ツカは堆肥の量とかかわり、塚状に盛り上げた形状によることや、耕地や作物、あるいはその年々、家などによってもその量が異なってくることであり、これらは「ツカ」というものの性格の一端を示すものといえよう。そして、大和から相模原台地南部の藤沢、さらに三浦半島までツカが使用されていたことがわかる。また、相模原北部の八王子で市域南西部の神奈川県よりの地域にツカの伝承が多くみられ、さらに「ツカは相模原の方でよく言う」といわれることは、中津山地東端に位置し、対岸に相模原市田名を望む城山町葉山島での事例⑬とともに「ツカ」の使用分布域に係わるものとして注目されるが、事例が少ないためこれだけから判断するのは難しいであろう⁽²⁵⁾。

二

本稿でとりあげている「ツカ」について、地方史の立場から言及

しているのが座間美都治である。座間は『相模原市史』の編さんなど、相模原地方の歴史と文化について多くの論稿を発表しているがその中の一つに上相原村（現相模原市相原）の小川家に残された農事記録の分析がある。⁽²⁶⁾

小川家はこの地方の富農家であるが、当家の所蔵文書には『社稷準録』と号された文化一二（一八一五）年から始まる農事記録があり、昭和二六（一九五二）年まで書き継がれている。この記録の形式は、座間によると、文化・文政年代には作物の蒔付状況と同時に追肥・除草・収穫などの年間農作業の状態を記しているが、天保年間以後は各蒔付作物を中心に、ツカ数・肥料の種類と分量・収穫量などを克明に記しているという。ツカについては、「小川家の種蒔帳では、作物の仕付け量・施肥量・収穫量はすべて塚の単位であらわ」されて、「この塚という語は、蒔付の際、堆肥に諸肥料を配合して畑に積むことから出てい」て、「一塚の肥料の量は、作物や地味によって違」い、「本地域では一反に三塚積むのが標準とされている」が、「多くの場合、一反の面積が必ずしも三塚には一致」せず、「要するに、塚というのは厳密に土地の面積を示すものではなく、耕作仕付の量を便宜的に示すもので、土地の肥瘠の關係により塚数の多少を生じるものであろう」とし、「なお、何蒔時という単位もあるが、これは水田の場合をいう」もので、「原則的には一蒔時は一畝の施肥量とされている」ものの、ツカと同じく「これも必ずしも一畝一蒔時の原則によらず」「この塚と蒔^(蒔カ)とを全体的に一一反平均にして見ると」「平均値をとって一反五塚として換算す

る以外に方法がなさそうである」が「この一反五塚が絶対的な数値でないことはいうまでもない」と述べている。⁽²⁷⁾

次に、時代は下って明治時代になるが、同じく現在は相模原市橋本にあたる旧橋本村（のちに相原村）に、当地の地主で相原村の村長にまで就任した相沢菊太郎の日記が残されている（以下、これを『相沢日記』と記す）。『相沢日記』は、菊太郎が一九歳の明治一八（一八八五）年から昭和三七（一九六二）年に九六歳をもって死ぬまでの七八年間にわたって書き継いだ日記であるが、その内容は日常生活から信仰・行事、天候、政治、経済、戦争など実に多岐に渡っていることが知られている。⁽²⁸⁾

そして、この『相沢日記』にもツカの記載がある。すべての年の確認を行っていないのでその用いられ方の変化等はわからないが、菊太郎が公職に就く以前の日記を書き始めた頃の数年を見てみると、ツカ（日記では塚の語を使用）は、主に「此日、岡穂を蒔こと十人にて五十塚余」（抜粋、明治一九年五月三〇日）というように、その日の作業量（作業を行った畑の面積）を表すのに用いられ、先にあげた小川家の農事記録で座間が指摘した作物の仕付け量・施肥量・収穫量まですべてツカ当りで表記することはなく、「八ヶ淵稻荷社前六塚畑糯岡穂蒔」（抜粋、明治一九年五月二九日）の六塚畑のように地名のようにして使われていることもある。さらに『相沢日記』では、畑の面積を表すのにツカと反・畝が併用されており、ツカが多く自家の畑での作業面積の表記であるのに対して、たとえば土地の登記や小作地の面積など、公の書類や他家との係わりがある

ものについては反や畝で記載される傾向にあり、これは、ツカが必ずしも定まった基準ではなく、さまざまな条件等によって相違がある点を考慮すれば理解できよう。⁽²⁹⁾

また、八王子市の旧浅川村には『石川日記』と呼ばれる農事を主とした記録があるが、これにも享保五(一七二〇)年からツカの記載があり、明治から大正にかけてもツカが登場してくるが、昭和六(一九三一)年にはツカが反・畝・歩と混用されて使用されているという。⁽³⁰⁾この点は、『相沢日記』でもツカで書いてもよいようなところを反や畝で表記している場合もあり、これが『石川日記』の用例のように混用されたものか否か、あるいはまた別な理由があるかなどは検討の余地がある。同様なことは、先にあげたツカ・マキを畝歩で計算するという事例⁽¹⁷⁾についてもいえるかもしれない。

以上、相模原及び北接する八王子に残る記録のいくつかをみてきたが、いずれもツカの記載が認められ、その中での使用例は、座間美都治などの分析により現在の伝承からうかがえるツカの性格に共通する点があり、さらにツカの用いられ方には時間的に変化があるらしいことなどが指摘できる。

おわりに

本稿では、相模原台地を中心としたごく限られた地域での事例をもとにして「ツカ」の伝承について述べてきた。ツカは播種時に堆肥を塚状に盛り上げた形状からきたもので、かつて県内で広く行わ

れていた種肥混合播と関係があると思われる。そして、ツカは多く畑の広さを表す単位とされ、さらには単に畑の面積をいうだけにとどまらず、さまざまな畑での作業量がツカ数で表現される場合もある。この時、ツカはあくまで作業量の目安のようなもので、畑のある土地やその他の条件等によって一反におけるツカ数が違い、ツカそのものの堆肥の量にも差異があって、このために公的な反畝歩による面積表示に対して私的な基準といえる。また、歴史的には近世中・後期までさかのぼることを示す記録があり、使用の分布域は、註(一)(二五)でも述べるように今後の資料の集積によって広がっていく可能性が大きい。

くりかえし述べるが、ヒトツカの面積や堆肥・種の量などは一定しておらず、調査地ごとの丹念な把握が必要になる。その地域や家のおかれている条件等を勘案しながら畑作の調査を進めていかねばならない。そして、従来比較的関心を持たれてこなかった側面から畑作の調査研究を積み上げていくことは、その成果をさらに豊かなものにしていくであろう。また、今回はツカを取り上げたが、本文中の事例でもわかるように他にもさまざまな基準があり、それらが併用されていたようである。ツカとそれらとの関係、あるいはこのようなその土地々々で使用されるいわば私的な度量衡と公的な度量衡との関係・区分の検討は今後の重要な課題と思われる。

本稿ではわずかな事例により若干の問題点を整理することとどまった。残された多くの問題については今後の課題としていきたい。大方の御叱正をお願いする次第である。

- (1) 相模原台地の事例を中心に述べるのは、この小論をまとめるにあたっての直接のきっかけとなった調査である相模原市の畑作調査(市教委が市立博物館の展示計画の基礎資料を得るために実施したものを筆者が企画・実施したことによる。この調査から浮び上った課題の一つがツカである。ただし後に述べるように、相模原台地の近隣地や三浦半島、はては群馬・長野県にも似たような伝承があり、今後の資料の集積によって、神奈川県全体やあるいはもっと広い地域の問題として扱える可能性が強い。なお、相模原市の同調査は、『相模原の畑作調査報告書』(市教委刊 一九八六)としてまとめられているが、この小論は同書のデータによるところが大きいことを付記しておく。
- (2) 『相模原の畑作調査報告書』 七頁。
- (3) (2)と同じ、四三頁。
- (4) (2)と同じ、四四頁。
- (5) 『生業調査報告書』 相模原市教委 一九八三 二頁。
- (6) (2)と同じ、四四頁。
- (7) (2)と同じ、四四頁。
- (8) (5)と同じ、二頁。
- (9) (2)と同じ、四四頁。
- (10) (2)と同じ、四四頁。
- (11) (2)と同じ、四四頁。
- (12) (5)と同じ、二頁。
- (13) (2)と同じ、四四頁。
- (14) 『地名調査報告書』 相模原市教委 一九八四 四七頁。
- (15) (5)と同じ、二頁。
- (16) (2)と同じ、四四頁。
- (17) 『神奈川県民俗分布地図』 神奈川県立博物館 一九八四 一五図。
- (18) 鈴木信氏御教示。鈴木氏は八王子市域にとどまらず、近隣の市や町を含めて多くの話者から聞き取りを行っている。
- (19) 筆者調査、中里利巳氏。
- (20) 『下鶴間・福田の民俗』 大和市教委 一九八三 一八一頁。なお、福田地区の生業部門の調査を担当した小川直之氏は、田畑の面積を表す「マキ(時)」「ツミ(摘)」について、ツミというのは摘み田や畑作穀類の点播法をいう「摘む」といういい方からの表現であろうし、マキも畑作耕種法からのいい方のように考えられるとし、「『ツミ』『マキ』は一部、水田にも使うといわれるが、畑地面積を示す時の方が一般的とされているのであり、その使われ方からは単に摘み田や畑作の播種法との関係といったことだけでなく、さらに稲作や畑作をめぐる農耕観にもつながる問題としても扱えるかもしれない。」とまとめている。(同書 一九〇頁)
- (21) 『稲作慣行調査報告書』下土棚・長後・今田・高倉』 藤沢市教育文化研究所 一九七四 一五二頁。
- (22) 『稲作慣行調査報告書』円行・打戻・用田』 藤沢市教育文化研究所 一九七六 一六三頁。
- (23) (22)と同じ、一六五頁。
- (24) 『三浦半島の民俗(Ⅰ)』 神奈川県立博物館 一九七一 二四頁。
- (25) この点については、群馬・長野両県でも耕地の広さの単位としてツ

カが使用されていた。群馬県では主に北毛山村地帯で伝承され、長野県では群馬県の北毛山村地帯に接するように東信地方で用いられたようである。ただし群馬県で「ツカは、もともと堆肥を耕地に運んで塚状に積み上げておくところから出発していると思われる」のに対して、長野県ではツカは收穫量を基準にしたものであり、施肥量としてはダンマキ・ダジリという単位であったという。また、同じ長野県の上田方面で、大麦・豆など五斗俵一俵分の收穫量がヒトツカで、これは畑の面積を表すものではないという（酒井佐氏御教示）。これらが今回取り上げたツカと地域的に連続するものなのかは不明であるが、今後充分に検討する必要がある。

『群馬県史資料編二五 民俗一』群馬県 一九八四 三九三頁。
『同 資料編二六 民俗二』一九八二 四八三頁。

『長野県史民俗編第一卷(二)』長野県 一九八六 二頁。

- (26) 「近世における北相一富農の農業実践記録」『相模原市立図書館古文書室紀要第二巻』市立図書館 一九七九。後に「社稷準繩録・年々種蒔覚帳解題」として『日本農書全集二二』農山漁村文化協会 一九八〇 に採録。

- (27) (26) と同じ、九頁。

- (28) 『相沢日記』の概要については、小木新造『ある明治人の生活史』中央公論社 一九八三 を参照。なお、『相沢日記』は私家版として刊行されている。

- (29) この点について小川直之氏は註(20)の中で、「この村(福田村)の近世の古文書にはすでに反畝歩計算が一般的であるのに、なぜこれ(マキ・ツミ)が昭和の始め頃まで使われ、しかも反畝歩の表し方

にはなじめなかったといわれているのだろうか」と疑問を呈している。

- (30) 鈴木利信氏御教示。『石川日記』は八王子千人同心の家柄で、日記の書き出しは享保五(一七二〇)年。農業のほか、千人同心を知るにも貴重な資料である。また、同じ八王子の旧犬目村の小野家文書の中にある「田畑山写」と書かれた文書中にも「塚」の記載があるという(鈴木氏御教示)。

(付記)

小論を起こすにあたり、小川直之・長田かな子・倉石あつ子・佐藤広・酒井佐・鈴木利信・畠山豊・堀内真の各氏に御教示をいただきました。末筆ながら感謝の意を表します。